

一百十日

夏目漱石



ぶらりと両手を垂さげたまま、圭けいさんがどこからか帰かえつて来る。

「どこへ行いつたね」

「ちよつと、町あを歩あ行るいて来た」

「何か観みるものがあるかい」

「寺が一軒あつた」

「それから」

「銀杏いちようの樹きが一本、門前もんぜんにあつた」

「それから」

「銀杏いちようの樹きから本堂まで、一丁半ばかり、石が敷き詰めてあつ

た。非常に細長い寺だつた」

「這入はいつて見たかい」

「やめて来た」

「そのほかに何もなにかね」

「別段何もない。いつたい、寺と云うものは大概の村にはあるね、君」

「そうさ、人間の死ぬ所には必ずあるはずじゃないか」

「なるほどそうだね」と圭さん、首を捻ひねる。圭さんは時々妙な事に感心する。しばらくして、捻ひねった首を真直まっすぐにして、圭さんがこう云った。

「それから鍛冶屋かじやの前で、馬の杓くつを替かえるところを見て来たが実に巧たくみなものだね」

「どうも寺だけにしては、ちと、時間が長過ぎると思った。馬の杓くつがそんなに珍しいかい」

「珍らしくなくつても、見たのさ。君、あれに使う道具が幾通りあると思う」

「幾通りあるかな」

「あてて見たまえ」

「あてなくつても好いから教えるさ」

「何でも七つばかりある」

「そんなにあるかい。何と何だい」

「何と何だつて、たしかにあるんだよ。第一爪をはがす鑿のみと、鑿たをたつちと、それから爪を削けずる小刀と、爪を剝えぐる妙みょうなものと、それから……」

「それから何があるかい」

「それから変なもの、まだいろいろあるんだよ。第一馬のおとなしいには驚ろいた。あんなに、削られても、剝られても平

「氣でいるぜ」

「爪だもの。人間だって、平気で爪を剪るじやないか」

「人間はそうだが馬だぜ、君」

「馬だって、人間だって爪に交りはないやね。君はよつぽど呑氣だよ」

「呑氣だから見ていたのさ。しかし薄暗い所で赤い鉄を打つと奇麗だね。ぴちぴち火花が出る」

「出るさ、東京の真中에서도出る」

「東京の真中에서도出る事は出るが、感じが違うよ。こう云う山の中の鍛冶屋は第一、音から違う。そら、ここまで聞えるぜ」

初秋の<sup>はつあき</sup>日脚<sup>ひあし</sup>は、うそ寒く、遠い国の方へ傾いて、<sup>かたむ</sup>淋しい山里の<sup>さび</sup>空氣が、心細い夕暮れを促<sup>うな</sup>がすなかに、かあんかあんと鉄を打つ音がする。

「聞えるだろう」と圭さんが云う。

「うん」と碌ろくさんは答えたぎり黙然もくねんとしている。隣りの部屋で何だか二人しきりに話をしている。

「そこで、その、相手が竹刀しなを落したんだあね。すると、その、ちよいと、小手こてを取ったんだあね」

「ふうん。とうとう小手を取られたのかい」

「とうとう小手を取られたんだあね。ちよいと小手を取ったんだが、そこがそら、竹刀しなを落したものだから、どうにも、こうにもしようがないやあね」

「ふうん。竹刀を落したのかい」

「竹刀は、そら、さつき、落してしまつたあね」

「竹刀を落してしまつて、小手を取られたら困るだろう」

「困らああね。竹刀も小手も取られたんだから」

二人の話しはどこまで行つても竹刀と小手で持ち切つている。黙然もくねんとして、対坐たいざしていた圭さんと碌さんは顔を見合わして、にやりと笑つた。

かあんかあんと鉄を打つ音が静かな村へ響き渡る。癩走かんぱしつた上に何だか心細い。

「まだ馬の杳くつを打つてる。何だか寒いね、君」と圭さんは白い浴衣ゆかたの下で堅くなる。碌さんも同じく白地の単衣ひとえの襟えりをかき合せて、だらしのない膝頭ひざがしらを行儀ぎようぎよく揃そろえる。やがて圭さんが云う。

「僕の小供の時住んでた町の真中に、一軒豆腐屋とうふやがあつてね」

「豆腐屋があつて？」

「豆腐屋があつて、その豆腐屋の角かどから一丁ばかり爪先上つまさきあがりに上がると寒磬寺かんけいじと云う御寺があつてね」



「寒磬寺と云う御寺がある？」

「ある。今でもあるだろう。門前から見るとただ大竹藪おおたけやぶばかり見えて、本堂も庫裏くらもないようだ。その御寺で毎朝四時頃になると、誰だか鉦かねを敲たたく」

「誰だか鉦を敲くつて、坊主が敲くんだらう」

「坊主だか何だか分らない。ただ竹の中でかんかんと幽かすかに敲くのさ。冬の朝なんぞ、霜しもが強く降つて、布団ふとんのなかで世の中の寒さを一二寸の厚さに遮さえぎつて聞いていると、竹藪のなかから、かんかん響いてくる。誰が敲くのだか分らない。僕は寺の前を通るたびに、長い石磴いしだたみと、倒れかかった山門さんもんと、山門を埋うづめ尽くすほどな大竹藪を見るのだが、一度も山門のなかを覗のぞいた事がない。ただ竹藪のなかで敲く鉦の音だけを聞いては、夜具うちの裏うらで海老えびのようになるのさ」

「海老のようになるって？」

「うん。海老のようになって、口のうちに、かんかん、かんかんと云うのさ」

「妙だね」

「すると、門前の豆腐屋がぎつと起きて、雨戸を明ける。ぎつぎつと豆を臼うすで挽ひく音がする。ざあざあと豆腐の水を易かえる音がする」

「君の家は全体どこにある訳わけだね」

「僕のうちは、つまり、そんな音が聞える所にあるのさ」

「だから、どこにある訳わけだね」

「すぐ傍そばさ」

「豆腐屋の向むかうか、隣りんりかい」

「なに二階にかいさ」

「どこの」

「豆腐屋の二階さ」

「へええ。そいつは……」と碌さん驚ろいた。

「僕は豆腐屋の子だよ」

「へええ。豆腐屋かい」と碌さんは再び驚ろいた。

「それから垣根の朝顔が、茶色に枯れて、引つ張るとがらから鳴る時分、白い靄もやが一面に降りて、町の外れはずの瓦斯灯ガスとうに灯ひがちらちらすると思うとまた鉦かねが鳴る。かんかん竹の奥で冴さえて鳴る。それから門前の豆腐屋がこの鉦を合図に、腰障子こししょうじをはめる」

「門前の豆腐屋と云うが、それが君のうちじゃないか」

「僕のうち、すなわち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。かんかんと云う声を聞きながら僕は二階へ上がって布団ふとんを敷ねいて寝る。

——僕よしはらあげのうちの吉原揚うまは旨うまかった。近所で評判だった」

隣り座敷の小手と竹刀は双方ともおとなしくなつて、向うの椽側では、六十余りの肥つた爺さんが、丸い背を柱にもたして、胡坐のまま、毛抜きで顎の髯を一本一本に抜いている。髯の根をうんと抑えて、ぐいと抜くと、毛抜は下へ弾ね返り、顎は上へ反り返る。まるで器械のように見える。

「あれは何日掛つたら抜けるだろう」と碌さんが圭さんに質問をかける。

「一生懸命にやつたら半日くらいで済むだろう」

「そうは行くまい」と碌さんが反対する。

「そうかな。じゃ一日かな」

「一日や二日で奇麗に抜けるなら訳はない」

「そうさ、ことによると一週間もかかるかね。見たまえ、あの丁寧に顎を撫で廻しながら抜いてるのを」

「あれじゃ。古いのを抜いちまわないうちに、新しいのが生え  
るかも知れないね」

「とにかく痛い事だろう」と圭さんは話頭をわとう転じた。

「痛いに違いないね。忠告してやろうか」

「なんて」

「よせつてさ」

「余計な事だ。それより幾日いくか掛つたら、みんな抜けるか聞いて  
見ようじゃないか」

「うん、よかろう。君が聞くんだよ」

「僕はいやだ、君が聞くのさ」

「聞いても好いいがつまらないじゃないか」

「だから、まあ、よそうよ」と圭さんは自己の申もうし出だしを惜おしげ気  
もなし撤回した。

一度途切れた村鍛冶の音は、今日山里に立つ秋を、幾重の稲妻いなずまに砕くつもりか、かあんかあんと澄み切った空の底に響き渡る。

「あの音を聞くと、どうしても豆腐屋の音が思い出される」と圭さんが腕組をしながら云う。

「全体豆腐屋の子がどうして、そんなになつたもんだね」

「豆腐屋の子がどんなになつたのさ」

「だって豆腐屋らしくないじゃないか」

「豆腐屋だって、肴屋さかなやだって——なろうと思えば、何にでもなれるさ」

「そうさな、つまり頭だからね」

「頭ばかりじゃない。世の中には頭のいい豆腐屋が何人いるかわらない。それでも生涯豆腐屋さ。気の毒なものだ」

「それじゃ何だい」と碌さんが小供らしく質問する。

「何だって君、やっぱりなろうと思うのさ」

「なろうと思つたつて、世の中がしてくれないのがだいぶあるだろ」

「だから気の毒だと云うのさ。不公平な世の中に生れれば仕方がないから、世の中がしてくれなくても何でも、自分でなろうと思うのさ」

「思つて、なれなければ？」

「なれなくつても何でも思うんだ。思つてるうちに、世の中が、してくれるようになるんだ」と圭さんは横着おうちやくを云う。

「そう注文通りに行けば結構だ。ハハハハ」

「だって僕は今日までそうして来たんだもの」

「だから君は豆腐屋らしくないと云うのだよ」

「これから先、また豆腐屋らしくなつてしまふかも知れないか

な。厄介やっかいだな。ハハハハ」

「なつたら、どうするつもりだい」

「なれば世の中がわるいのさ。不公平な世の中を公平にしてやろうと云うのに、世の中が云う事をきかなければ、向むこうの方が悪いのだろう」

「しかし世の中も何だね、君、豆腐屋がえらくなるようなら、自然えらい者が豆腐屋になる訳だね」

「えらい者た、どんな者だい」

「えらい者つて云うのは、何さ。例たとえば華族かぞくとか金持とか云うものさ」と碌さんはすぐ様えらい者を説明してしまふ。

「うん華族や金持か、ありや今でも豆腐屋じゃないか、君」

「その豆腐屋連れんが馬車へ乗つたり、別荘を建てたりして、自分だけの世の中のような顔をしているから駄目だよ」



「だから、そんなのは、本当の豆腐屋にしてしまふのさ」

「こつちがする気でも向がならないやね」

「ならないのをさせるから、世の中が公平になるんだよ」

「公平に出来れば結構だ。大いにやりたまえ」

「やりたまえじゃいけない。君もやらなくつちやあ。——ただ、

馬車へ乗つたり、別荘を建てたりするだけならいいが、むやみに

人を圧逼あつぱくするぜ、ああ云う豆腐屋は。自分が豆腐屋の癖に」

と圭さんはそろそろ慷慨こうがいし始める。

「君はそんな目に逢あつた事があるのかい」

圭さんは腕組をしたままふふんと云つた。村鍛冶の音は不相変あいかわらず

かあんかあんと鳴る。

「まだ、かんかん遣やつてる。——おい僕の腕は太いだろう」と

圭さんは突然腕まくりをして、黒い奴やつを碌さんの前に圧おしつけ

た。

「君の腕は昔から太いよ。そうして、いやに黒いね。豆を磨いた事があるのかい」

「豆も磨いた、水も汲んだ。——おい、君粗忽で人の足を踏んだらどつちが謝まるものだろう」

「踏んだ方が謝まるのが通則のようだな」

「突然、人の頭を張りつけたら？」

「そりや氣違だろう」

「氣狂なら謝まらないでもいいものかな」

「そうさな。謝まらさす事が出来れば、謝まらさす方がいいだろう」

「それを氣違の方で謝まれて云うのは驚ろくじゃないか」

「そんな氣違があるのかい」

「今の豆腐屋連れんはみんな、そう云う気違ばかりだよ。人を圧迫した上に、人に頭を下げさせようとするんだぜ。本来なら向むこうが恐れ入るのが人間だろうじゃないか、君」

「無論それが人間さ。しかし気違の豆腐屋なら、うつちやつて置くよりほかに仕方があるまい」

圭さんは再びふふんと云った。しばらくして、

「そんな気違を増長させるくらいなら、世の中に生れて来ない方がいい」と独り言ひとごとのようにつけた。

村鍛冶の音は、会話が切れるたびに静かな里の端はじから端までかあんかあんと響く。

「しきりにかかんやるな。どうも、あの音は寒磬寺かんけいじの鉦かねに似ている」

「妙に気に掛るんだね。その寒磬寺の鉦の音と、気違の豆腐屋

とでも何か関係があるのかい。——全体君が豆腐屋の倅せがれから、今日こんにちまでに変化した因縁いんねんはどう云う筋道なんだい。少し話して聞かせないか」

「聞かせてもいいが、何だか寒いじゃないか。ちよいと夕飯前ゆうめしに温泉ゆに這入はいろう。君いやか」

「うん這入ろう」

圭さんと碌さんは手拭てぬぐいをぶら下げて、庭へ降りる。棕櫚緒しゅうおの貸下駄かしげたには都らしく宿の焼印やきいんが押してある。

## 二

「この湯は何に利きくんだろう」と豆腐屋の圭けいさんが湯槽ゆづねのなかで、ざぶざぶやりながら聞く。

「何に利くかなあ。分析表を見ると、何にでも利くようだ。——  
君そんなに、臍へそばかりぎぶぎぶ洗ったって、出臍でべそは癒なおらないぜ」  
「純透明だね」と出臍の先生は、両手に温泉ゆを掬くんで、口へ入  
れて見る。やがて、

「味も何もない」と云いながら、流しへ吐き出した。

「飲んでもいいんだよ」と碌ろくさんはがぶがぶ飲む。

圭さんは臍へそを洗うのをやめて、湯槽ゆかの縁ふちへ肘ひじをかけて漫然まんぜんと、  
硝子ガラスび越しに外を眺めている。碌さんは首だけ湯に漬つかって、相  
手の臍へそから上を見上げた。

「どうも、いい体格からだだ。全く野生やせいのままだね」

「豆腐屋出身だからなあ。体格体格が悪わるいと華族や金持ちと喧嘩けんか  
は出来ない。こっちは一人向むこうは大勢だから」

「さも喧嘩の相手があるような口振くちぶりだね。当とうの敵てきは誰たれだい」

「誰でも構わないさ」

「ハハハ呑気のんきなもんだ。喧嘩にも強そうだが、足の強い人には

おどろ

驚いたよ。君といっしょでなければ、きのうここまでくる勇氣

はなかったよ。実は途中で御免蒙ごめんこうむろうかと思つた」

「實際少し気の毒だったね。あれでも僕はよほど加減して、歩行あるいたつもりだ」

「本当かい？ はたして本当ならえらいものだ。——何だか怪しいな。すぐ付け上がるからいやだ」

「ハハハ付け上がるものか。付け上がるのは華族と金持ばかりだ」

「また華族と金持ちか。眼の敵かたきだね」

「金はなくつても、こっちは天下の豆腐屋だ」

「そうだ、いやしくも天下の豆腐屋だ。野生の腕力家だ」

「君、あの窓の外に咲いている黄色い花は何だろう」  
碌さんは湯の中で首を振ねじ向ける。

「かぼちやさ」

「馬鹿あ云つてる。かぼちやは地の上を這はつてるものだ。あれは竹へからまつて、風呂場の屋根へあがつているぜ」

「屋根へ上がつちや、かぼちやになれないかな」

「だつておかしいじゃないか、今頃花が咲くのは」

「構うものかね、おかしいたつて、屋根にかぼちやの花が咲く  
さ」

「そりや唄うたかい」

「そうさな、前半は唄のつもりでもなかったんだが、後半に至つて、つい唄になつてしまつたようだ」

「屋根にかぼちやが生なるようだから、豆腐屋が馬車なんかへ乗

るんだ。不都合千万だよ」

「また慷慨か、こんな山の中へ来て慷慨したって始まらないさ。それより早く阿蘇へ登つて噴火口から、赤い岩が飛び出すところでも見るさ。——しかし飛び込んじや困るぜ。——何だか少し心配だな」

「噴火口は実際猛烈なものだろうな。何でも、沢庵石のような岩が真赤になつて、空の中へ吹き出すそうだけ。それが三四町四方一面に吹き出すのだから壮んに違ない。——あしたは早く起きなくつちや、いけないよ」

「うん、起きる事は起きるが山へかかつてから、あんなに早く歩行いちゃ、御免だ」と碌さんはすぐ予防線を張つた。

「ともかくも六時に起きて……」

「六時に起きる？」



「六時に起きて、七時半に湯から出て、八時に飯を食つて、八時半に便所から出て、そうして宿を出て、十一時に阿蘇神社へ参詣して、十二時から登るのだ」

「へえ、誰が」

「僕と君がさ」

「何だか君一人りで登るようだぜ」

「なに構わない」

「ありがたい仕合せだ。まるで御供のようだね」

「うふん。時に昼は何を食うかな。やつぱり饅飩にして置くか」

と圭さんが、あすの昼飯の相談をする。

「饅飩はよすよ。ここいらの饅飩はまるで杉箸を食うようで腹

が突張つてたまらない」

「では蕎麦か」

「蕎麦も御免だ。僕は麵類めんるいじゃ、とても凌しのげない男だから」

「じゃ何を食うつもりだい」

「何でも御馳走ごちそうが食いたい」

「阿蘇あその山の中に御馳走があるはずがないよ。だからこの際、  
ともかくも饅飩で間に合せて置いて……」

「この際は少し変だぜ。この際た、どんな際なんだい」

「剛健な趣味を養成するための旅行だから……」

「そんな旅行なのかい。ちつとも知らなかつたぜ。剛健はいい  
が饅飩は平ひらに不賛成だ。こう見えても僕は身分が好いいんだから  
ね」

「だから柔弱にゆうじやくでいけない。僕なぞは学資に窮した時、一日に白  
米二合で間に合せた事がある」

「瘦やせたらう」と碌さんが気の毒な事を聞く。

「そんなに痩せもしなかったがただ虱しらみが湧わいたには困こつた。——  
君、虱しらみが湧わいた事があるかい」

「僕はないよ。身分が違ちがわあ」

「まあ経験して見たまえ。そりや容易やすに狩かり尽つせるもんじやないぜ」

「煮え湯ゆで洗濯せんたくしたらよかろう」

「煮え湯ゆ？ 煮え湯ゆならいいかも知れない。しかし洗濯せんたくするにしてもただでは出来こないからな」

「なあるほど、銭ぜにが一文もんもないんだね」

「一文もないのさ」

「君どうした」

「仕方がないから、襦シヤツ衣イを敷居しきいの上うへ乗のせて、手頃てぐらな丸まるい石いしを拾ひろつて来こて、こつこつ叩たたいた。そうしたら虱しらみが死しなないうちに、

襯衣が破れてしまった」

「おやおや」

「しかもそれを宿のかみさんが見つけて、僕に退去を命じた」

「さぞ困つたらうね」

「なあに困らんさ、そんな事で困つちや、今日まで生きていられるものか。これから追ひ追ひ華族や金持ちを豆腐屋にするんだからな。滅多めったに困つちや仕方がない」

「すると僕なんぞも、今に、とおふい、油揚あぶらげ、がんもどきと怒鳴どなつて、あるかなくつちやならないかね」

「華族でもない癖に」

「まだ華族にはならないが、金はだいぶあるよ」

「あつてもそのくらいじゃ駄目だ」

「このくらいじゃ豆腐とうふいと云う資格はないのかな。大おおに僕の財

産を見縊みくびつたね」

「時に君、背中せなかを流してくれないか」

「僕のも流すのかい」

「流してもいいさ。隣りの部屋の男も流しくらをやってたぜ、君」

「隣りの男の背中せなかは似たり寄つたりだから公平だが、君の背中と、僕の背中とはだいぶ面積が違ちがうから損だ」

「そんな面倒な事を云うなら一人で洗うばかりだ」と圭さんは、

両足を湯壺ゆづぼの中ちゆうちゆうにうんと踏ん張ふつて、ぎゅうと手拭てぬぐいをしごいた

と思おもつたら、両端りようはしを握にぎつたまま、ぴしやりと、音を立たてて斜はすに

膏切あぶらぎつた背中へあてがった。やがて二の腕ちからこぶへ力瘤ちからこぶが急に出来上

がると、水を含んだ手拭は、岡のように肉づいた背中をぎちぎち磨こすり始める。

手拭の運動につれて、圭さんの太い眉まゆがくしやりと寄つて来る。鼻の穴が三角形に膨脹ぼうちやうして、小鼻が勃ぼつとして左右に展開する。口は腹を切る時のように堅く喰締くいしばつたまま、両耳の方まで割さけてくる。

「まるで仁王におうのようだね。仁王の行水ぎやうすいだ。そんな猛烈な顔がよ  
くできるね。こりや不思議だ。そう眼をぐりぐりさせなくつても、背中は洗えそうなものだがね」

圭さんは何にも云わずに一生懸命にぐいぐい擦こする。擦つては時々、手拭を温泉ゆに漬つけて、充分水を含ませる。含ませるたびに、碌さんの顔へ、汗あせと膏あぶらと垢あかと温泉ゆの交まじつたものが十五六滴たずつ飛んで来る。

「こいつは降参だ。ちよつと失敬して、流しの方へ出るよ」と  
碌さんは湯槽ゆたねを飛び出した。飛び出しはしたものの、感心の極きんごく、

流しへ突つ立つたまま、茫然ぼうぜんとして、仁王の行水を眺めている。  
「あの隣りの客は元来何者だろう」と圭さんが槽ふねのなかから質問する。

「隣りの客どころじゃない。その顔は不思議だよ」

「もう済んだ。ああ好い心持だ」と圭さん、手拭いったんの一端を放すや否や、ざぶんと温泉ゆの中へ、石のように大きな背中を落す。満槽まんそうの湯は一度に面喰めんくらつて、槽の底から大恐惶だいきようこうを持ち上げる。ざあつざあつと音がして、流しへ溢あふれだす。

「ああいい心持ちだ」と圭さんは波のなかで云った。

「なるほどそう遠慮なしに振舞ふるまったら、好い心持に相違ない。君は豪傑だよ」

「あの隣りの客は竹刀しなひと小手こての事ばかり云ってるじゃないか。全体何者だい」と圭さんは呑気のんきなものだ。

「君が華族と金持ちの事を気にするよなものだろう」

「僕のは深い原因があるのだが、あの客のは何だか訳が分らない」

「なに自分じゃあ、あれで分ってるんだよ。——そこでその小手を取られたんだあね——」と碌さんが隣りの真似をする。

「ハハハハそこでそら竹刀を落したんだあねか。ハハハハ。どうも気楽なものだ」と圭さんも真似して見る。

「なにあれでも、実は慷慨家かも知れない。そらよく草双紙にあるじゃないか。何とかの何々、実は海賊の張本毛剃九右衛門て」

「海賊らしくもないぜ。さつき温泉に這入りに来る時、覗いて見たら、二人共木枕きまくらをして、ぐうぐう寝ていたよ」

「木枕をして寝られるくらいの頭だから、そら、そこで、その、



小手を取られるんだあね」と碌さんは、まだ真似をする。

「竹刀も取られるんだあねか。ハハハハ。何でも赤い表紙の本を胸の上へ載せたまんま寝ていたよ」

「その赤い本が、何でもその、竹刀を落したり、小手を取られるんだあね」と碌さんは、どこまでも真似をする。

「何だろう、あの本は」

「伊賀の水月い が すいげつさ」と碌さんは、躊躇ちゆうちゆうなく答えた。

「伊賀の水月？ 伊賀の水月た何だい」

「伊賀の水月を知らないのかい」

「知らない。知らなければ恥かな」と圭さんはちよつと首を捻ひねつた。

「恥じゃないが話せないよ」

「話せない？ なぜ」

「なぜって、君、荒木又右衛門を知らないか」

「うん、又右衛門か」

「知ってるのかい」と碌さんまた湯の中へ這入る。圭さんはまた槽ふねのなかへ突立つたった。

「もう仁王の行水は御免だよ」

「もう大丈夫、背中はあらわれない。あまり這入つてると逆上のぼせるから、時々こう立つのさ」

「ただ立つばかりなら、安心だ。——それで、その、荒木又右衛門を知ってるかい」

「又右衛門？ そうさ、どこかで聞いたようだね。豊臣秀吉の家来じゃないか」と圭さん、飛んでもない事を云う。

「ハハハハこいつはあきれた。華族や金持ちを豆腐屋にするだなんて、えらい事を云うが、どうも何なんにも知らないね」

「じゃ待った。少し考えるから。又右衛門だね。又右衛門、荒木又右衛門だね。待ちたまえよ、荒木の又右衛門と。うん分つた」

「何だい」

「相撲取だ」  
すもうとり

「ハハハハ荒木、ハハハハ荒木、又ハハハハ又右衛門が、相撲取り。いよいよ、あきれてしまった。実に無識だね。ハハハハ」と碌だいきょうえつさんは大恐悦である。

「そんなにおかしいか」

「おかしいつて、誰に聞かしたつて笑うぜ」

「そんなに有名な男か」

「そうさ、荒木又右衛門じゃないか」

「だから僕もどこかで聞いたように思うのさ」

「そら、落ち行く先きは九州相良さがらつて云うじやないか」

「云うかも知れんが、その句は聞いた事がないようだ」

「困った男だな」

「ちつとも困りやしない。荒木又右衛門ぐらい知らなくつたつて、毫ぜいごうも僕の人格には関係はしまい。それよりも五里やまみちの山路が苦になつて、やたらに不平を並べるような人が困つた男なんだ」

「腕力や脚力を持ち出されちや駄目だね。とうてい叶かないっこない。そこへ行くと、どうしても豆腐屋出身の天下だ。僕も豆腐屋へ年期奉公に住み込んで置けばよかつた」

「君は第一平生から惰弱だじやくでいけない。ちつとも意志がない」

「これでよつぽど有るつもりなんだがな。ただ鯰うどんに逢あつた時ばかりは全く意志が薄弱だと、自分ながら思うね」

「ハハハハつまらん事を云つていらあ」

「しかし豆腐屋にしちや、君のからだは奇麗過ぎるね」

「こんな黒くつてもかい」

「黒い白いは別として、豆腐屋は大概ほりもの筍青があるじゃないか」

「なぜ」

「なぜか知らないが、筍青があるもんだよ。君、なぜほらなかつた」

「馬鹿あ云つてらあ。僕のような高尚な男が、そんな愚ぐな真似をするものか。華族や金持がほれば似合うかも知れないが、僕にはそんなものは向かない。荒木又右衛門だつて、ほつちやいまい」

「荒木又右衛門か。そいつは困つたな。まだそこまでは調べが届いていないからね」

「そりやどうでもいいが、ともかくもあしたは六時に起きるん

だよ」

「そうして、ともかくも饅頭を食うんだろう。僕の意志の薄弱なのにも困るかも知れないが、君の意志の強固なのにも辟易へきえきするよ。うちを出てから、僕の云う事は一つも通らないんだからな。全く唯々いひだくだく諾々として命令に服しているんだ。豆腐屋主義はきびしいもんだね」

「なにこのくらい強硬にしないと増長していけない」

「僕がかい」

「なあに世の中の奴らがさ。金持ちとか、華族とか、なんとかとか、生意気に威張る奴らがさ」

「しかしそりや見当違だぜ。そんなものの身代りに僕が豆腐屋主義に屈従するなたまらない。どうも驚ろいた。以来君と旅行するのは御免だ」

「なあに構わんさ」

「君は構わなくつてもこつちは大いに構うんだよ。その上旅費は奇麗に折半せつぱんされるんだから、愚ぐの極きよくだ」

「しかし僕の御蔭で天地の壯觀たる阿蘇あその噴火口を見る事ができらるだろう」

「可愛想かわいそうに。一人ひとりだつて阿蘇ぐらい登れるよ」

「しかし華族や金持なんて存外いづくじ意氣地がないもんで……」

「また身代りか、どうだい身代りはやめにして、本当の華族や金持ちの方へ持つて行つたら」

「いづれ、その内持つてくつもりだがね。——意氣地がなくつて、理窟りくつがわからなくつて、個人としちやあ三文の価値もないもんだ」

「だから、どしどし豆腐屋にしてしまふさ」

「その内、してやろうと思ってるのさ」

「思ってるだけじゃ剣呑けんのんなものだ」

「なあに年ねんが年中ねんじゅう思ってるいりや、どうにかなるもんだ」

「随分気が長いね。もつとも僕の知ったものにね。虎列拉コレラになるなると思つていたら、とうとう虎列拉コレラになったものがあるがね。君のもそう、うまく行くと好いけれども」

「時にあの髻ひげを抜いてた爺さんが手拭てぬぐいをさげてやって来たぜ」

「ちようど好いから君一つ聞いて見たまえ」

「僕はもう湯気ゆけに上がりそうだから、出るよ」

「まあ、いいさ、出ないでも。君がいやなら僕が聞いて見るから、もう少し這入はいっていたまえ」

「おや、あとから竹刀しなひと小手こてがいつしよに来たぜ」

「どれ。なるほど、揃そろって来た。あとから、まだ来るぜ。やあ



婆さんが来た。婆さんも、この湯槽へ這入るのかな」

「僕はともかくも出るよ」

「婆さんが這入るなら、僕もともかくも出よう」

風呂場を出ると、ひやりと吹く秋風が、袖口からすうと這入つて、素肌を臍のあたりまで吹き抜けた。出臍の圭さんは、はつくしようとき大きな苦沙弥を無遠慮にやる。上がり口に白芙蓉が五六輪、夕暮の秋を淋しく咲いている。見上げる向では阿蘇の山がごうごうと遠くながら鳴っている。

「あすこへ登るんだね」と碌さんが云う。

「鳴ってるぜ。愉快だな」と圭さんが云う。

「姉さん、この人は肥ふとつてるだろう」

「だいぶん肥こえていなはります」

「肥えてるつて、おれは、これで豆腐屋だもの」

「ホホホ」

「豆腐屋じゃおかしいかい」

「豆腐屋の癖くせに西郷隆盛せいこうりゅうせいのような顔かほをしているからおかしいんだよ。時にこう、精進料理しょうじんりょうりじゃ、あした、御山おやまへ登れのぼれろうもな

いな」

「また御馳走ごちそうを食たいたがる」

「食たいたがるつて、これじゃ營養不良えいようびやうりやうになるばかりだ」

「なにこれほど御馳走ごちそうがあればたくさんだ。——湯葉ゆばに、椎茸しいたけ

に、芋いもに、豆腐、いろいろあるじゃないか」

「いろいろある事はあるがね。ある事は君の商売道具しょうばいどうぐまである

んだが——困つたな。昨日は<sup>きのう</sup>饅<sup>うどん</sup>ばかり食わせられる。きょうは湯葉に椎茸ばかりか。ああああ」

「君この芋を食つて見たまえ。掘りたてですこぶる<sup>び</sup>美味<sup>み</sup>だ」

「すこぶる剛健な味がしやしないか——おい姉さん、<sup>さかな</sup>肴は何もないのかい」

「あいにく何もござりまつせん」

「ござりまつせんは弱つたな。じゃ玉子があるだろう」

「玉子ならござりまつす」

「その玉子を半熟にして来てくれ」

「何に致します」

「半熟にするんだ」

「煮て参じますか」

「まあ煮るんだが、半分煮るんだ。半熟を知らないか」

「いいえ」

「知らない？」

「知りまつせん」

「どうも辟易へきえきだな」

「何でござりまつす」

「何でもいいから、玉子を持って御出おいで。それから、おい、ちよつと待った。君ビールを飲むか」

「飲んでもいい」と圭たけさんは泰然たいぜんたる返事をした。

「飲んでもいいか、それじゃ飲まなくつてもいいんだ。——よすかね」

「よさなくつても好いい。ともかくも少し飲もう」

「ともかくもか、ハハハ。君ほど、ともかくもの好きな男はないね。それで、あしたになると、ともかくも饅頭まんじゅうを食おうと云う

んだろう。——姉さん、ビールもついでに持つてくるんだ。玉子とビールだ。分つたらうね」

「ビールはござりまつせん」

「ビールがない？——君ビールはないとき。何だか日本の領地でないような気がする。情なさけない所だ」

「なければ、飲まなくつても、いいさ」と圭さんはまた泰然たる挨拶あいさつをする。

「ビールはござりませんばつてん、恵え比び寿すならござります」

「ハハハハいよいよ妙になつて来た。おい君ビールでない恵比寿があるつて云うんだが、その恵比寿でも飲んで見るかね」

「うん、飲んでもいい。——その恵比寿はやつぱり饅びんに這はい入いつてるんだらうね、姉さん」と圭さんはこの時ようやく下女に話しかけた。

「ねえ」と下女は肥後訛りの返事をする。

「じゃ、ともかくもその栓を抜いてね。鑿ごと、ここへ持つておいで」

「ねえ」

下女は心得貌こころえがおに起つて行く。幅の狭い唐縮緬とうちりめんをちよきり結びおしりに御臀おしりの上へ乗せて、緋かすりの筒袖つつそでをつんつるてんに着ている。髪だけは一種異様の束髪そくはつに、だいぶ碌さんと圭さんの胆たんを寒からしめたようだ。

「あの下女は異彩を放つてるね」と碌さんが云うと、圭さんは平気な顔をして、

「そうさ」と何の苦もなく答えたが、

「単純でいい女だ」とあとへ、持つて来て、木に竹を接いだよつうにつけた。

「剛健な趣味がありやしないか」

「うん。実際田舎者の精神に、文明の教育を施すと、立派な人物が出来るんだがな。惜しい事だ」

「そんなに惜しけりや、あれを東京へ連れて行って、仕込んで見るがいい」

「うん、それも好かろう。しかしそれより前に文明の皮を剥かなくっちゃ、いけない」

「皮が厚いからなかなか骨が折れるだろう」と碌さんは水瓜のような事を云う。

「折れても何でも剥くのさ。奇麗な顔をして、下卑た事ばかりやってる。それも金がない奴だと、自分だけで済むのだが、身分がいいと困る。下卑た根性を社会全体に蔓延させるからね。大変な害毒だ。しかも身分がよかつたり、金があつたりするも

のに、よくこう云う性根しやうねの悪い奴があるものだ」

「しかも、そんなのに限かぎって皮がよいよい厚あいんだろう」

「体裁たいざいだけはすこぶる美事みじとなものさ。しかし内心はあの下女よりよつぽどすれているんだから、いやになつてしまふ」

「そうかね。じゃ、僕もこれから、ちと剛健党ごうけんとうの御仲間入りをやろうかな」

「無論むろんの事さ。だからまず第一着だいいつちやくにあした六時に起きて……」

「御昼ごひるに饅頭うどんを食つてか」

「阿蘇あその噴火口ふんかぐちを觀みて……」

「癩癩かんしゃくを起して飛び込まないようように要心ようじんをしてか」

「もつとも崇高なる天地間の活力現象きつしやうに対して、雄大の氣象きしやうを養つて、齷齪あくそくたる塵事じんじを超越するんだ」

「あんまり超越ちやうえつし過ぎるとあとで世の中が、いやになつて、か



えつて困るぜ。だからそのところは好加減いいかげんに超越して置く事にしようじゃないか。僕の足じゃとうていそうえらく超越出来そうもないよ」

「弱い男だ」

筒袖つつそでの下女が、盆の上へ、麦酒ビールを一本、洋盃コップを二つ、玉子を四個、並べつくして持つてくる。

「そら恵比寿が来た。この恵比寿がビールでないんだから面白い。さあ一杯飲いっぱいむかい」と碌さんが相手に洋盃を渡す。

「うん、ついでにその玉子を二つ貰おうか」と圭さんが云う。

「だって玉子は僕が誂あつらえたんだぜ」

「しかし四つとも食う気かい」

「あしたの饅飩うどんが気になるから、このうち二個は携帯して行くと思うんだ」

「うん、そんなら、よそう」と圭さんはすぐ断念する。

「よすとなると気の毒だから、まあ上げよう。本来なら剛健党が玉子なんぞを食うのは、ちと贅沢ぜいたくの沙汰だが、可哀想かわいそうでもあるから、——さあ食うがいい。——姉さん、この恵比寿はどこでできるんだね」

「おおかた熊本でござりまつしよ」

「ふん、熊本製の恵比寿か、なかなか旨うまいや。君どうだ、熊本製の恵比寿は」

「うん。やつぱり東京製と同じようだ。——おい、姉さん、恵比寿はいいが、この玉子は生なまだぜ」と玉子を割った圭さんはちよつと眉をひそめた。

「ねえ」

「生だと云うのに」

「ねえ」

「何だか要領を得ないな。君、半熟を命じたんじゃないか。君のも生か」と圭さんは下女を捨てて、碌さんに向つてくる。

「半熟を命じて不熟を得たりか。僕のを一つ割つて見よう。——おやこれは駄目だ……」

「うで玉子か」と圭さんは首を延のぼして相手の膳ぜんの上を見る。

「全熟だ。こつちのはどうだ。——うん、これも全熟だ。——姉さん、これは、うで玉子じゃないか」と今度は碌さんが下女にむかう。

「ねえ」

「そうなのか」

「ねえ」

「なんだか言葉の通じない国へ来たようだな。——向うの御客

さんのが生玉子で、おれのは、うで玉子なのかい」

「ねえ」

「なぜ、そんな事をしたのだい」

「半分煮て参りました」

「なあるほど。こりや、よく出来てらあ。ハハハハ、君、半熟のいわれが分つたか」と碌さんよこで横手を打つ。

「ハハハハ単純なものだ」

「まるで落しおと噺ばなし見たようだ」

「間違いましたか。そちらのも煮て参りますか」

「なにこれでいいよ。——姉さん、ここから、阿蘇まで何里あるかい」と圭さんが玉子に関係のない方面へ出て来た。

「ここが阿蘇でござります」

「ここが阿蘇なら、あした六時に起きるがものはない。もう

にさんちとうりゆう  
二三日逗留して、すぐ熊本へ引き返そうじゃないか」と碌さんがすぐ云う。

「どうぞ、いつまでも御逗留なさいまつせ」

「せっかく、姉さんも、ああ云つて勧めるものだから、どうだろう、いつそ、そうしたら」と碌さんが圭さんの方を向く。圭さんは相手にしない。

「ここも阿蘇だつて、阿蘇郡なんだろう」とやはり下女を追窮している。

「ねえ」

「じゃ阿蘇の御宮まではどのくらいあるかい」

「御宮までは三里でござります」

「山の上までは」

「御宮から二里でござりますたい」

「山の上はえらいだろうね」と碌さんが突然飛び出してくる。

「ねえ」

「御前登おまえった事があるかい」

「いいえ」

「じゃ知らないんだね」

「いいえ、知りまつせん」

「知らなけりや、しようがない。せつかく話を聞こうと思ったのに」

「御山へ御登りなさいますか」

「うん、早く登りたくつて、仕方がないんだ」と圭さんが云うと、

「僕は登りたなくなつて、仕方がないんだ」と碌さんが打ち壊ぶわした。

「ホホホそれじゃ、あなただけ、ここへ御逗留なさいまつせ」  
「うん、ここで寝転ねころんで、あのごうごう云う音を聞いている方が楽らくなようだ。ごうごうと云やあ、さつきより、だいぶ烈はげしくなつたようだぜ、君」

「そうさ、だいぶ、強くなつた。夜のせいだろう」

「御山が少し荒れておりますたい」

「荒れると烈しく鳴るのかね」

「ねえ。そうしてよ、ながたくさんに降つて参りますたい」

「よ、なた何だい」

「灰でござりまつす」

下女は障子をあけて、椽側えんがわへ人指ひとさしゆびを擦すりつけながら、

「御覧なさいまつせ」と黒い指先を出す。

「なるほど、始終しじゆう降つてるんだ。きのうは、こんなじゃなかつ

たね」と圭さんが感心する。

「ねえ。少し御山が荒れておりますたい」

「おい君、いくら荒れても登る気かね。荒れ模様なら少々延ばそうじゃないか」

「荒れればなお愉快だ。滅多めったに荒れたところなんぞが見られるものじゃない。荒れる時と、荒れない時は火の出具合が大変違うんだそうだ。ねえ、姉さん」

「ねえ、今夜は大変赤く見えます。ちよと出て御覧なさいませ」

どれと、圭さんはすぐ椽側へ飛び出す。

「いやあ、こいつは熾さかんだ。おい君早く出て見たまえ。大変だよ」

「大変だ？　大変じゃ出て見るかな。どれ。——いやあ、こいつは——なるほどえらいものだね——あれじゃとうてい駄目だ」



「何が」

「何がって、——登る途中で焼き殺されちまうだろう」

「馬鹿を云っていらあ。夜だから、ああ見えるんだ。実際昼間から、あのくらいやってるんだよ。ねえ、姉さん」

「ねえ」

「ねえかも知れないが危険だぜ。ここにこうしていても何だか顔が熱いようだ」と碌さんは、自分の頬ほっぺたを撫なで廻す。

「大袈裟おおげさな事ばかり云う男だ」

「だって君の顔だって、赤く見えるぜ。そらそこの垣の外に広い稲田があるだろう。あの青い葉が一面に、こう照らされてい  
るじゃないか」

「嘘うそばかり、あれは星のひかりで見えるのだ」

「星のひかりと火のひかりとは趣おもむきが違うさ」

「どうも、君もよほど無学だね。君、あの火は五六里先きにあるのだぜ」

「何里先きだつて、向うの方の空が一面に真赤になつてるじゃないか」と碌さんは向を<sup>むこう</sup>をゆびさして大きな輪を指の先で描<sup>えが</sup>いて見せる。

「よるだもの」

「夜だつて……」

「君は無学だよ。荒木又右衛門は知らなくつても好いが、このくらいな事が分らなくつちや恥だぜ」と圭さんは、横から相手の顔を見た。

「人格にかかわるかね。人格にかかわるのは我慢するが、命にかかわつちや降参だ」

「まだあんな事を云っている。——じゃ姉さんに聞いて見るが

いい。ねえ姉さん。あのくらい火が出たつて、御山へは登れるんだろう」

「ねえい」

「大丈夫かい」と碌さんは下女の顔を覗き込む。

「ねえい。女でも登りますたい」

「女でも登つちや、男は是非登る訳かな。飛んだ事になったもんだ」

「ともかくも、あしたは六時に起きて……」

「もう分つたよ」

言い棄てて、部屋のなかに、ごろりと寝転んだ、碌さんの去つたあとに、圭さんは、黙然と、眉を軒上げて、奈落から半空に向つて、真直に立つ火の柱を見詰めていた。

「おいこれから曲がつていよいよ登るんだろう」と圭けいさんが振り返る。

「ここを曲がるかね」

「何でも突き当りに寺の石段が見えるから、門を這はい入らずに左へ廻れと教えたぜ」

「饅うどん屋やの爺じいさんがか」と碌ろくさんはしきりに胸を撫なで廻す。

「そうさ」

「あの爺さんが、何を云うか分つたもんじゃやない」

「なぜ」

「なぜって、世の中に商売もあろうに、饅うどん屋になるなんて、第一それからが不ふり了りょう簡けんだ」

「饅飩屋だつて正業だ。金を積んで、貧乏人を圧迫するのを道楽にするような人間より遙かに尊はるといさたつ」

「尊といかも知れないが、どうも饅飩屋は性しやうに合わない。——しかし、とうとう饅飩を食わせられた今となつて見ると、いくら饅飩屋の亭主を恨うらんでも後あとの祭りだから、まあ、我慢して、ここから曲がつてやろう」

「石段は見えるが、あれが寺かなあ、本堂も何もないぜ」

「阿蘇あその火で焼けちまつたんだらう。だから云わない事じゃない。——おい天氣が少々劍吞けんのんになつて来たぜ」

「なに、大丈夫だ。天祐てんゆうがあるんだから」

「どこに」

「どこにでもあるさ。意思のある所には天祐がごろごろしているものだ」

「どうも君は自信家だ。剛健党ごうけんとうになるかと思うと、天祐派てんゆうはになる。この次ぎには天誅組てんちゆうぐみにでもなつて筑波山つくばさんへ立て籠こもるつもりだろう」

「なに豆腐屋時代から天誅組さ。——貧乏人をいじめるような——豆腐屋だつて人間だ——いじめるつて、何らの利害もないんだぜ、ただ道楽だうらくなんだから驚ろく」

「いつそんな目に逢あつたんだい」

「いつでもいいさ。桀紂けつちゆうと云えば古来から悪人として通とおり者ものだが、二十世紀はこの桀紂で充満しているんだぜ、しかも文明の皮を厚く被かぶつてるから小憎こにくらしい」

「皮ばかりで中味のない方がいいくらいなものかな。やつぱり、金があり過ぎて、退屈だと、そんな真似まねがしたくなるんだね。馬鹿に金を持たせると大概桀紂になりたがるんだろう。僕ぼくのよ

うな有徳うとくの君子は貧乏だし、彼らのような愚劣はくな輩は、人を苦しめるために金銭を使っているし、困った世の中だなあ。いっそ、どうだい、そう云う、ももんがをあを十把じゅうば一ひとからげにして、阿蘇の噴火口から真逆まっさかさま様に地獄の下へ落しちまったら」

「今に落としてやる」と圭さんは薄黒く渦卷うずまく煙りを仰いで、草鞋わらじあし足をうんと踏張ふんばった。

「大変な権幕けんまくだね。君、大丈夫かい。十把一とからげを放り込まないうちに、君が飛び込んじやいけないぜ」

「あの音は壮烈だな」

「足の下が、もう揺れているようだ。——おいちよつと、地面へ耳をつけて聞いて見たまえ」

「どんなだい」

「非常な音だ。たしかに足の下がうなってる」

「その割に煙りがこないな」

「風のせいだ。北風だから、右へ吹きつけるんだ」

「樹きが多いから、方角が分らない。もう少し登ったら見当がつくだろう」

しばらくは雑木林ぞうきばやしの間に行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善よくても並んで歩行あるく訳には行かぬ。圭さんは大きな足を悠悠ゆうゆうと振つて先へ行く。碌さんは小さな体からだをすぼめて、小股こまたに後あとから尾ついて行く。尾ついて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心している。感心しながら歩行あるいて行くと、だんだんおくれてしまう。

路は左右に曲折して爪先つまさきあが上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失った。樹と樹の間をすかして見ても何にも見えぬ。山を下りる人は一人もない。上あがるものにも全く出合わな



い。ただ所々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切れが茨にかかつている。そのほかに人の気色はさらさない、鯁鮓腹の碌さんは少々心細くなつた。

きのうの澄み切つた空に引き易えて、今朝宿を立つ時からの霧模様には少し掛念もあつたが、晴れさえすればと、好い加減な事を頼みにして、とうとう阿蘇の社までは漕ぎつけた。白木の宮に禰宜の鳴らす柏手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぽつりと何やら額に落ちた。鯁鮓を煮る湯気が障子の破れから、吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過ぎは雨かなとも思われた。

雑木林を小半里ほど来たら、怪しい空がとうとう持ち切れなくなつたと見えて、梢にしたたる雨の音が、さあと北の方へ走る。あとから、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻える木の葉と共

にまた北の方へ走る。碌さんは首を縮めて、えつと舌打ちをした。

一時間ほどで林は尽きる。尽きると云わんよりは、一度に消えると云う方が適當であろう。ふり返る、後は知らず、貫いて来た一筋道のほかは、東も西も茫々たる青草が波を打って幾段となく連なる後から、むくむくと黒い煙りが持ち上がってくる。噴火口こそ見えないが、煙りの出るのは、つい鼻の先である。

林が尽きて、青い原を半丁と行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立っている。蝙蝠傘は畳んだまま、帽子さえ、被らずに毬栗頭をぬつくと草から上へ突き出して地形を見廻している様子だ。

「おうい。少し待ってくれ」

「おうい。荒れて来たぞ。荒れて来たぞうう。しつかりしろう」

「しつかりするから、少し待ってくれえ」と碌さんは一生懸命に草のなかを這はい上がる。ようやく追いつく碌さんを待ち受けて、

「おい何をぐずぐずしているんだ」と圭さんが遣やつつける。

「だから饅飩じゃ駄目だと云ったんだ。ああ苦しい。——おい君の顔はどうしたんだ。真黒だ」

「そうか、君のも真黒だ」

圭さんは、無雑作むぞうさに白地しろじの浴衣ゆかたの片袖かたそでで、頭から顔を撫なで廻す。碌さんは腰から、ハンケチを出す。

「なるほど、拭ふくと、着物がどす黒くなる」

「僕のハンケチも、こんなだ」

「ひどいものだな」と圭さんは雨のなかに坊主頭さくらを曝しながら、空模様を見廻す。

「よ、な、だ。よ、な、が雨に溶けて降つてくるんだ。そら、その薄の上を見たまえ」と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて濡れながら、靡く。

「なるほど」

「困つたな、こりゃ」

「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。あの煙りの出る所を目当にして行けば訳はない」

「訳はなさそうだが、これじゃ路が分らないぜ」

「だから、さつきから、待つていたのさ。ここを左りへ行くか、右へ行くかと云う、ちようど股の所なんだ」

「なるほど、両方共路になつてゐるね。——しかし煙りの見当から云うと、左りへ曲がる方がよさそうだ」

「君はそう思うか。僕は右へ行くつもりだ」

「どうして」

「どうしてって、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない」

「そうかい」と碌さんは、からだ 身躯を前に曲げながら、おお 蔽いかかる草を押し分けて、五六歩、左の方へ進んだが、すぐに取つて返して、

「駄目のようだ。足跡は一つも見当らない」と云つた。

「ないだろう」

「そつちにはあるかい」

「うん。たった二つある」

「二つぎりかい」

「そうさ。たった二つだ。そら、こことここに」と圭さんはしゆすばり 縷子張の蝙蝠傘こうもりの先で、かぶさるすすき 薄の下に、かす 幽かに残る馬の足跡を見

せる。

「これだけかい心細いな」

「なに大丈夫だ」

「天祐てんゆうじゃないか、君の天祐はあてにならない事おびただ夥しいよ」

「なにこれが天祐さ」と圭さんが云いわい了おわらぬうちに、雨を捲まいて颯さつとおろす一陣の風が、碌ろくさんの麦藁帽むぎわらぼうを遠慮なく、吹き込めて、五六間先まで飛ばして行く。眼に余る青草は、風を受けて一度に向うへ靡なびいて、見るうちに色が変わると思うと、また靡なびき返してもとの態さまに戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見たまえ」と圭さんが幾重いくえとなく起伏する青い草の海を指さす。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んじまった」

「帽子が飛んだ？ いいじゃないか帽子が飛んだって。取つて

くるさ。取つて来てやろうか」

圭さんは、いきなり、自分の帽子の上へ蝙蝠傘を重しおもに置いて、颯と、薄の中に飛び込んだ。

「おいこの見当か」

「もう少し左りだ」

圭さんの身躯は次第に青いものの中に、深くはまつて行く。しまいには首だけになった。あとに残った碌さんはまた心配になる。

「おうい。大丈夫か」

「何だあ」と向うの首から声が出る。

「大丈夫かよう」

やがて圭さんの首が見えなくなった。

「おうい」

鼻の先から出る黒煙りは鼠色の円柱の各部が絶間なく蠕動を起しつつあるごとく、むくむくと捲き上がって、半空から大氣の裡に溶け込んで碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然として、首の消えた方角を見つめている。しばらくすると、まるで見当の違つた半丁ほど先に、圭さんの首が忽然と現われた。

「帽子はないぞう」

「帽子はいらないよう。早く帰つてこようい」

圭さんは坊主頭を振り立てながら、薄の中を泳いでくる。

「おい、どこへ飛ばしたんだい」

「どこだか、相談が纏らないうちに飛ばしちまつたんだ。帽子はいいが、歩行くのは厭になつたよ」

「もういやになつたのか。まだあるかないじゃないか」



「あの煙と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、あるく元気がなくなるね」

「今から駄々を捏ねちゃ仕方がない。——壮快じゃないか。あのむくむく煙の出てくるところは」

「そのむくむくが気味が悪るいんだ」

「冗談云つちや、いけない。あの煙の傍へ行くんだよ。そうして、あの中を覗き込むんだよ」

「考えると全く余計な事だね。そうして覗き込んだ上に飛び込めば世話はない」

「ともかくもあるこう」

「ハハハハともかくもか。君がともかくもと云い出すと、つい釣り込まれるよ。さつきもともかくもで、とうとう鱺鮓を食っちゃまった。これで赤痢にでも罹れば全くともかくもの御蔭だ」

「いいさ、僕が責任を持つから」

「僕の病気の責任を持ったって、しようがないじゃないか。僕の代理に病気になれもしまい」

「まあ、いいさ。僕が看病をして、僕が伝染して、本人の君は助けるようにしてやるよ」

「そうか、それじゃ安心だ。まあ、少々あるのかな」

「そら、天気もだいぶよくなつて来たよ。やつぱり天祐てんゆうがあるんだよ」

「ありがたい仕合せだ。あるく事はあるくが、今夜は御馳走ごちそうを食わせなくつちや、いやだぜ」

「また御馳走か。あるきさえすればきつと食わせるよ」

「それから……」

「まだ何か注文があるのかい」

「うん」

「何だい」

「君の経歴を聞かせるか」

「僕の経歴つて、君が知ってる通りさ」

「僕が知ってる前のさ。君が豆腐屋の小僧であつた時分から……」

「小僧じゃないぜ、これでも豆腐屋のせがれの伴なんだ」

「その伴の時、寒磬寺かんけいじの鉦かねの音を聞いて、急に金持がにくらし

くなつた、因縁話いんねんばなしをさ」

「ハハハハそんなに聞きたければ話すよ。その代り剛健党にならなくちゃいけないぜ。君なんざあ、金持の悪党を相手にした事がないから、そんなに呑気のんきなんだ。君はドイツキンスのりょうとものがた両都物語りと云う本を読んだ事があるか」

「ないよ。伊賀の水月は読んだが、ドイツキンスは読まない」

「それだからなお貧民に同情が薄いんだ。——あの本のねしまいの方に、御医者さんの獄中でかいた日記があるがね。悲惨なものだよ」

「へえ、どんなものだい」

「そりや君、仏国ふっこくの革命の起る前に、貴族が暴威ぶゐを振ふるつて細民を苦しめた事がかいてあるんだが。——それも今夜僕が寝ねながら話してやろう」

「うん」

「なあに仏国の革命なんてえのも当然の現象さ。あんなに金持ちや貴族が乱暴らんぼうをすりや、ああなるのは自然じぜんの理窟りくつだからね。ほら、あの轟々ごうごう鳴つて吹き出すのと同じ事さ」と圭さんは立ち留どまつて、黒い煙の方を見る。

濛々もうもうと天地を鎖とざす秋雨しゅううを突き抜いて、百里の底から沸のき騰ぼる

濃いものが渦うずを捲まき、渦を捲いて、幾百噸トンの量とも知れず立ち上がる。その幾百噸の煙りの一分子がことごとく震動して爆発するかと思わるほどの音が、遠い遠い奥の方から、濃いものと共に頭の上へ躍おどり上がって来る。

雨と風のなかに、毛虫のような眉を攢あつめて、余念もなく眺ながめていた、圭さんが、非常な落ちついた調子で、

「雄大だろう、君」と云った。

「全く雄大だ」と碌さんも真面目まじめで答えた。

「恐ろしいくらいだ」しばらく時をきって、碌さんが付け加えた言葉はこれである。

「僕の精神はあれだよ」と圭さんが云う。

「革命か」

「うん。文明の革命さ」

「文明の革命とは」

「血を流さないのさ」

「刀を使わなければ、何を使うのだい」

圭さんは、何にも云わずに、平手ひらてで、自分の坊主頭をぴしや

ぴしやと二返叩へんたたいた。

「頭か」

「うん。相手も頭でくるから、こつちも頭で行くんだ」

「相手は誰だい」

「金力や威力で、たよりのない同胞どうぼうを苦しめる奴らさ」

「うん」

「社会の悪徳を公然商売にしている奴らさ」

「うん」

「商売なら、衣食のためと云う言い訳も立つ」

「うん」

「社会の悪徳を公然道楽にしている奴らは、どうしても叩きつけなければならん」

「うん」

「君もやれ」

「うん、やる」

圭さんは、のっそりと踵をめぐらした。碌さんは黙然として尾いて行く。空にあるものは、煙りと、雨と、風と雲である。地にあるものは青い薄と、女郎花と、所々にわびしく交る桔梗のみである。二人は犛々として無人の境を行く。

薄の-highさは、腰を没するほどに延びて、左右から、幅、尺足らずの路を蔽うている。身を横にしても、草に触れずに進む訳には行かぬ。触れば雨に濡れた灰がつく。圭さんも碌さんも、

白地の浴衣ゆかたに、白の股引ももひきに、足袋たびと脚絆きゃはんだけを紺こんにして、濡れた薄をがさつかせて行く。腰から下はどぶ鼠ねずみのように染まつた。腰から上といえども、降る雨に誘われて着く、よなを、一面に浴びたから、ほとんど下水へ落ち込んだと同様の始末である。たださえ、うねり、くねっている路だから、草がなくなっても、どこへどう続いているか見極めみきわのつくものではない。草をかぶればなおさらである。地に残る馬の足跡さえ、ようやく見つけたくらいだから、あとの始末は無論天に任せて、あるいていると云わねばならぬ。

最初のうちこそ、立ち登る煙りを正面に見て進んだ路は、いつの間にかやら、折れ曲つて、次第に横からよなを受くるようになった。横に眺める噴火口が今度は自然じねんに後ろの方に見えだした時、圭さんはぴたりと足を留とめた。



「どうも路が違うようだね」

「うん」と碌さんは恨めしい顔をして、同じく立ち留<sup>どま</sup>った。

「何だか、情<sup>なさけ</sup>ない顔をしているね。苦しいかい」

「実際情けないんだ」

「どこか痛むかい」

「豆が一面に出来て、たまらない」

「困ったな。よつぽど痛いかい。僕の肩へつらまったら、どうだね。少しは歩<sup>ある</sup>行き好<sup>い</sup>いかも知れない」

「うん」と碌さんは氣のない返事をしたまま動かない。

「宿へついたら、僕が面白い話をするよ」

「全体いつ宿へつくんだい」

「五時には湯元へ着く予定なんだが、どうも、あの煙りは妙だよ。右へ行つても、左りへ行つても、鼻の先にあるばかりで、遠

くもならなければ、近くもならない」

「上<sup>のぼ</sup>りたてから鼻の先にあるぜ」

「そうさな。もう少しこの路を行つて見ようじゃないか」

「うん」

「それとも、少し休むか」

「うん」

「どうも、急に元気がなくなつたね」

「全く饅<sup>うどん</sup>飩の御蔭<sup>おかげ</sup>だよ」

「ハハハハ。その代り宿へ着くと僕が話し<sup>ごちそう</sup>の御馳走をするよ」

「話しも聞きたくなくなつた」

「それじゃまたビールでない恵<sup>え</sup>比<sup>び</sup>寿<sup>す</sup>でも飲むさ」

「ふふん。この様子じゃ、とても宿へ着けそうもないぜ」

「なに、大丈夫だよ」

「だって、もう暗くなつて来たぜ」

「どれ」と圭さんは懐中時計を出す。「四時五分前だ。暗いのは天気のせいだ。しかしこう方角が變つて来ると少し困るな。山へ登つてから、もう二三里はあるいたね」

「豆の様子じゃ、十里くらいあるいてるよ」

「ハハハハ。あの煙りが前に見えたんだが、もうずっと、後ろうしろになつてしまった。すると我々は熊本の方へ二三里近付いた訳かね」

「つまり山からそれだけ遠ざかつた訳さ」

「そう云えばそうさ。——君、あの煙りの横の方からまた新しい煙が見えだしたぜ。あれが多分、新しい噴火口なんだらう。あのむくむく出るところを見ると、つい、そこにあるようだがな。どうして行かれないだらう。何でもこの山のつい裏に違

ないんだが、路がないから困る」

「路があつたつて駄目だよ」

「どうも雲だか、煙りだか非常に濃く、頭の上へやってくる。壮さかんなものだ。ねえ、君」

「うん」

「どうだい、こんな凄すこい景色はとても、こう云う時でなけりや見られないぜ。うん、非常に黒いものが降つて来る。君あたまが大変だ。僕の帽子を貸してやろう。——こう被かぶつてね。それから手拭てぬぐいがあるだろう。飛ぶといけないから、上から結いわいつけるんだ。——僕がしばつてやろう。——傘かさは、畳むがいい。どうせ風に逆さからうぎりだ。そうして杖つえにつくさ。杖が出来ると、少しは歩行あけるだろう」

「少しは歩行あきよくなつた。——雨も風もだんだん強くなるよ

うだね」

「そうさ、さつきは少し晴れそうだったがな。雨や風は大丈夫だが、足は痛むかね」

「痛いさ。登るときは豆が三つばかりだったが、一面になったんだもの」

「晩にね、僕が、煙草の吸殻すいからを飯粒めしつぶで練ねって、膏藥こうやくを製つくってやろう」

「宿へつけば、どうでもなるんだが……」

「あるいてるうちが難義か」

「うん」

「困ったな。——どこか高い所へ登ると、人の通る路が見えるんだがな。——うん、あすこに高い草山が見えるだろう」

「あの右の方かい」

「ああ。あの上へ登つたら、噴火孔ふんかこうがひと眼ひめに見えるに違ちがない。そうしたら、路が分るよ」

「分るつて、あすこへ行くまでに日が暮れてしまふよ」

「待ちたまえちよつと時計を見るから。四時八分だ。まだ暮れやしない。君ここに待つていたまえ。僕がちよつと物見ものみをしてくるから」

「待つてるが、帰りに路が分らなくなると、それこそ大変だぜ。二人離れ離れになつちまうよ」

「大丈夫だ。どうしたつて死ぬ氣遣きづかいはないんだ。どうかしたら大きな声を出して呼ぶよ」

「うん。呼んでくれたまえ」

圭さんは雲と煙の這はい廻るなかへ、猛然として進んで行く。碌すずさんは心細くもただ一人薄すすのなかに立つて、頼みにする友の

後姿を見送っている。しばらくするうちに圭さんの影は草のなかに消えた。

大きな山は五分に一度ぐらいつ時をきつて、普段よりは烈しく轟となる。その折は雨も煙りも一度に揺れて、余勢が横なぐりに、悄然と立つ碌さんの体軀へ突き当るように思われる。草は眼を走らす限りを尽くしてことごとく煙りのなかに靡く上を、さあさあと雨が走って行く。草と雨の間を大きな雲が遠慮もなく這い廻る。碌さんは向うの草山を見つめながら、顫えている。よなのしずくは、碌さんの下腹まで浸み透る。

毒々しい黒煙りが長い渦を七巻まいて、むくりと空を突く途端に、碌さんの踏む足の底が、地震のように撼いたと思った。あとは、山鳴りが比較的静まった。すると地面の下の方で、「おおおい」と呼ぶ声がする。

碌さんは両手を、耳の後ろに宛あてた。

「おおおい」

たしかに呼んでいる。不思議な事にその声が妙に足の下から湧わいて出る。

「おおおい」

碌さんは思わず、声をしるべに、飛び出した。

「おおおい」と癩かんの高い声を、肺の縮むほど絞しぼり出すと、太い声が、草の下から、

「おおおい」と応こたえる。圭さんに違ちがない。

碌さんは胸まで来る薄をむやみに押し分けて、ずんずん声のする方に進んで行く。

「おおおい」

「おおおい。どこだ」



「おおおい。ここだ」

「どこだああ」

「ここだああ。むやみにくるとあぶないぞう。落ちるぞう」

「どこへ落ちたんだああ」

「ここへ落ちたんだああ。気をつけろう」

「気はつけるが、どこへ落ちたんだああ」

「落ちると、足の豆が痛いぞうう」

「大丈夫だああ。どこへ落ちたんだああ」

「ここだあ、もうそれから先へ出るんじゃないよう。おれがそつちへ行くから、そこで待っているんだよう」

圭さんのどうまごえ胴間声は地面のなかを通つて、だんだん近づいて来る。

「おい、落ちたよ」

「どこへ落ちたんだい」

「見えないか」

「見えない」

「それじゃ、もう少し前へ出た」

「おや、何だい、こりゃ」

「草のなかに、こんなものがあるから剣呑だ」

「どうして、こんな谷があるんだろう」

「かようせき火熔石の流れたあとだよ。見たまえ、なかは茶色で草が一本

も生えていない」

「なるほど、厄介なやつものがあるんだね。君、上がれるかい」

「上がれるものか。高さが二間ばかりあるよ」

「弱ったな。どうしよう」

「僕の頭が見えるかい」

「毬栗の片割れが少し見える」

「君ね」

「ええ」

「薄の上へ腹這はらばいになつて、顔だけ谷の上へ乗り出して見たまえ」

「よし、今顔を出すから待つていたまえよ」

「うん、待つてる、ここだよ」と圭さんは蝙蝠傘こうもりで、崖がけの腹を

とんとん叩たたく。碌ろくさんは見当を見計みはからつて、ぐしやりと濡れ薄の

上へ腹をつけて恐る恐る首だけを溝みぞの上へ出して、

「おい」

「おい。どうだ。豆は痛むかね」

「豆なんざどうでもいいから、早く上がってくれたまえ」

「ハハハハ大丈夫だよ。下の方が風があたらなくつて、かえつ

て楽らくだぜ」

「楽だつて、もう日が暮れるよ、早く上がらないと」

「君」

「ええ」

「ハンケチはないか」

「ある。何にするんだい」

「落ちる時に蹴爪けつまずいて生爪なまつめを剥はがした」

「生爪を？ 痛むかい」

「少し痛む」

「あるけるかい」

「あるけるとも。ハンケチがあるなら抛なげてくれたまえ」

「裂いてやろうか」

「なに、僕が裂くから丸めて抛なげてくれたまえ。風で飛ぶと、いけないから、堅く丸めて落すんだよ」

「じくじく濡れてるから、大丈夫だ。飛ぶ気遣はない。いいか、抛げるぜ、そら」

「だいぶ暗くなつて来たね。煙は相変らず出ているかい」

「うん。空中一面の煙だ」

「いやに鳴るじゃないか」

「さつきより、烈しくなつたようだ。——ハンケチは裂けるか

い

「うん、裂けたよ。繃帯はもうでき上がった」

「大丈夫かい。血が出やしないか」

「足袋の上へ雨といっしょに煮染んでる」

「痛そうだね」

「なあに、痛いたつて。痛いのは生きてる証抛だ」

「僕は腹が痛くなつた」

「濡ぬれた草の上に腹をつけているからだ。もういいから、立ちたまえ」

「立つと君の顔が見えなくなる」

「困るな。君いつその事に、ここへ飛び込まないか」

「飛び込んで、どうするんだい」

「飛び込めないかい」

「飛び込めない事も無いが——飛び込んで、どうするんだい」

「いつしよにあるくのさ」

「そうしてどこへ行くつもりだい」

「どうせ、噴火口から山の麓ふもとまで流れた岩のあとなんだから、この穴の中をあるいていたら、どこかへ出るだろう」

「だって」

「だって厭いやか。厭いやじゃ仕方がない」

「厭じやないが——それより君が上がれると好いんだがな。君  
どうかして上がって見ないか」

「それじや、君はこの穴の縁ふちを伝つたつて歩行あるくさ。僕は穴の下を  
あるくから。そうしたら、上下うえしたで話が出来るからいいだろう」

「縁ふちにや路はありやしない」

「草ばかりかい」

「うん。草がね……」

「うん」

「胸はくらいまで生はえている」

「ともかくも僕は上がれないよ」

「上がれないって、それじや仕方がないな——おい。——おい。」

「——おいって云うのにおい。なぜ黙もくってるんだ」

「ええ」

「大丈夫かい」

「何が」

「口は利<sup>き</sup>けるかい」

「利けるさ」

「それじゃ、なぜ黙ってるんだ」

「ちよつと考えていた」

「何を」

「穴から出る工夫をさ」

「全体何だつて、そんな所へ落ちたんだい」

「早く君に安心させようと思つて、草山ばかり見つめていたもんだから、つい足元が御留守<sup>おるす</sup>になつて、落ちてしまった」

「それじゃ、僕のために落ちたようなものだ。気の毒だな、どうかして上がつて貰えないかな、君」



「そうさな。——なに僕は構わないよ。それよりか。君、早く立ちたまえ。そう草で腹を冷やしちや毒だ」

「腹なんかどうでもいいさ」

「痛むんだろう」

「痛む事は痛むさ」

「だから、ともかくも立ちたまえ。そのうち僕がここで出る工夫を考えて置くから」

「考えたら、呼ぶんだぜ。僕も考えるから」

「よし」

会話はしばらく途切れる。草の中に立って碌さんが覚束なく四方を見渡すと、向うの草山へぶつかつた黒雲が、峰の半腹で、どつと崩れて海のように濁つたものが頭を去る五六尺の所まで押し寄せてくる。時計はもう五時に近い。山のなかばはたださ

え薄暗くなる時分だ。ひゆうひゆうと絶間なく吹き卸おろす風は、吹くたびに、黒い夜を遠い国から持つてくる。刻々と逼せまる暮色のなかに、嵐はまんじに吹きすさむ。噴火孔ふんかこうから吹き出す幾万斛いくまんごくの煙りはまんべんのなかに万遍なく捲まき込まれて、嵐の世界を尽くして、どす黒く漲みなぎり渡る。

「おい。いるか」

「いる。何か考えついたかい」

「いや。山の模様はどうだい」

「だんだん荒れるばかりだよ」

「今日は何日いくかだっけかね」

「今日は九月二日さ」

「ことによると二百十日かも知れないね」

会話はまた切れる。二百十日の風と雨と煙りは満目まんもくの草を埋うず

め尽くして、一丁先は靡く姿さえ、判然と見えぬようになった。

「もう日が暮れるよ。おい。いるかい」

谷の中の人は二百十日の風に吹き浚われたものか、うんとも、すんとも返事がない。阿蘇の御山は割れるばかりにござうと鳴る。

碌さんは青くなつて、また草の上へ棒のように腹這になつた。

「おおおい。おらんのか」

「おおおい。こつちだ」

薄暗い谷底を半町ばかり登つた所に、ぼんやりと白い者が動いている。手招きをしているらしい。

「なぜ、そんな所へ行つたんだああ」

「ここから上がるんだああ」

「上がれるのかああ」

「上がれるから、早く来おい」

碌さんは腹の痛いのも、足の豆も忘れて、脱兎だつとの勢いきおいで飛び出した。

「おい。ここいらか」

「そこだ。そこへ、ちよつと、首を出して見てくれ」

「ごうか。——なるほど、こりや大変浅い。これなら、僕が蝙蝠傘こうもりを上から出したら、それへ、取とっ捕つからまって上がれるだろう」

「傘かさだけじゃ駄目だ。君、気の毒だがね」

「うん。ちつとも気の毒じゃない。どうするんだ」

「兵児帯へこおびを解いて、その先を傘かさの柄えへ結びつけて——君の傘の柄は曲つてるだろう」

「曲つてるとも。大いに曲つてる」

「その曲つてる方へ結びつけてくれないか」

「結びつけるとも。すぐ結びつけてやる」

「結びつけたら、その帯の端はじを上からぶら下げてくれたまえ」

「ぶら下げるとも。訳わけはない。大丈夫だから待っていたまえ。

——そうら、長いのが天竺てんじくから、ぶら下がったろう」

「君、しつかり傘かさを握かつていなくつちやいけないぜ。僕の身体からだ

は十七貫六百目あるんだから」

「何貫目あったって大丈夫だ、安心して上がりたまえ」

「いいかい」

「いいとも」

「そら上がるぜ。——いや、いけない。そう、ずり下がって来

ては……」

「今度は大丈夫だ。今のは試ためして見ただけだ。さあ上がった。

大丈夫だよ」

「君が滑<sup>す</sup>べると、二人共落ちてしまふぜ」

「だから大丈夫だよ。今のは傘の持ちようがわるかつたんだ」

「君、薄<sup>すすき</sup>の根へ足をかけて持ち<sup>こた</sup>応えていたまえ。——あんまり前の方で踏<sup>ふ</sup>ん張<sup>ば</sup>ると、崖<sup>がけ</sup>が崩<sup>くず</sup>れて、足が滑べるよ」

「よし、大丈夫。さあ上がった」

「足を踏ん張ったかい。どうも今度もあぶないようだな」

「おい」

「何だい」

「君は僕が力がないと思つて、大<sup>おお</sup>に心配するがね」

「うん」

「僕だつて一人前の人間だよ」

「無論さ」

「無論なら安心して、僕に信頼したらよかろう。からだは小さ

いが、朋友を一人谷底から救い出すぐらいの事は出来るつもりだ」

「じゃ上がるよ。そらつ……」

「そらつ……もう少した」

豆で一面に腫れ上がった両足を、うんと薄の根に踏ん張った碌さんは、素肌を二百十日の雨に曝したまま、海老のように腰を曲げて、一生懸命に、傘の柄にかじりついている。麦藁帽子を手拭で縛りつけた頭の下から、真赤にいきんだ顔が、八分通り阿蘇卸ろしに吹きつけられて、喰い締めた反つ齒の上にはよ、なが容赦なく降ってくる。

毛繻子張り八間の蝙蝠の柄には、幸い太い瘤だらけの頑丈な自然木が、付けてあるから、折れる気遣はまずあるまい。その自然木の彎曲した一端に、鳴海絞りの兵児帯が、薩摩の強弓に

新しく張つた弦のごとくぴんと薄を押し分けて、先は谷の中にかくれている。その隠れているあたりから、しばらくすると大きな毬栗頭いがぐりあたまがぬつと現われた。

やつと云う掛声と共に両手が崖の縁にかかるが早いか、大入道おおにゆうどうの腰から上は、斜めに尻しりに挿さした蝙蝠傘こうもりと共に谷から上へ出た。同時に碌さんは、どさんと仰向きあおむになつて、薄すすきの底に倒れた。

## 五

「おい、もう飯だ、起きないか」

「うん。起きないよ」

「腹の痛いのは癒なおったかい」

「まあ大抵癒たいていったようなものだが、この様子じゃ、いつ痛くな



るかも知れないね。ともかくも、うどん餛飩がた祟つたんだから、容易には癒りそうもない」

「そのくらい口が利きければたしかなものだ。どうだいこれから出掛けようじゃないか」

「どこへ」

「阿蘇あそへさ」

「阿蘇へまだ行く気かい」

「無論さ、阿蘇へ行くつもりで、出掛けたんだもの。行かない訳わけには行かない」

「そんなものかな。しかしこの豆じゃ残念ながら致し方がない」

「豆は痛むかね」

「痛むの何のつて、こうして寝ていても頭へずうんずうんと響くよ」

「あんなに、吸殻すいがらをつけてやったが、毫ごうも利目ききめがないかな」

「吸殻で利目があつちや大変だよ」

「だって、付けてやる時は大いにありがたそうだったぜ」

「癒いると思つたからさ」

「時に君はきのう怒つたね」

「いつ」

「はだか裸はだかで蝙蝠傘こうちもりを引つ張るときさ」

「だって、あんまり人を軽蔑けいべつするからさ」

「ハハハしかし御蔭おかげで谷から出られたよ。君が怒らなければ僕は今頃谷底で往生してしまつたかも知れないところだ」

「豆つぶを潰つぶすのも構わずに引つ張つた上に、裸すすきで薄すすきの中へ倒れて

さ。それで君はありがたいとも何とも云わなかつたぜ。君は人

情のない男だ」

「その代りこの宿まで担いで来てやつたじゃないか」

「担いでくるものか。僕は独立して歩行いて来たんだ」

「それじゃここはどこだか知ってるかい」

「大に人を愚弄したものだ。ここはどこだつて、阿蘇町さ。しかもともかくもの鱧鮓を強いられた三軒置いて隣の馬車宿だね。半日山のなかを馳けあるいて、ようやく下りて見たら元の所だなんて、全体何てえ間拔だろう。これからもう君の天祐は信用しないよ」

「二百十日だったから悪るかった」

「そうして山の中で芝居染みた事を云つてさ」

「ハハハハしかしあの時は大いに感服して、うん、うん、て云つたようだぜ」

「あの時は感心もしたが、こうなつて見ると馬鹿氣ていらあ。

君ありや真面目かい」

「ふふん」

「冗談か」

「どつちだと思う」

「どつちでも好いが、真面目なら忠告したいね」

「あの時僕の経歴談を聴かせろつて、泣いたのは誰だい」

「泣きやしないやね。足が痛くつて心細くなつたんだね」

「だって、今日は朝から非常に元氣じゃないか、昨日た別人の

観がある」

「足の痛いにかかわらずか。ハハハハ。実はあんまり馬鹿氣て  
いるから、少し腹を立てて見たのさ」

「僕に対してかい」

「だってほかに対するものがないから仕方がないさ」

「いい迷惑だ。時に君は粥かゆを食うなら誂あつらえてやろうか」

「粥もだがだね。第一、馬車は何時に出るか聞いて貰いたい」

「馬車でどこへ行く気だい」

「どこつて熊本さ」

「帰るのかい」

「帰らなくつてどうする。こんな所に馬車馬と同居していちや命が持たない。ゆうべ、あの枕元でぼんぼん羽目を蹴けられたには実に弱つたぜ」

「そうか、僕はちつとも知らなかつた。そんなに音がしたかね」

「あの音が耳はいに入らなければ全く剛健党に相違ない。どうも君は憎くらしいほど善よく寝る男だね。僕にあれば堅い約束をして、経歴談をきかせるの、医者いしやの日記を話すのつて、いざとなると、まるで正体なしに寝ちまうんだ。——そうして、非常な

いびきをかいて——」

「そうか、そりゃ失敬した。あんまり疲れ過ぎたんだよ」

「時に天気はどうだい」

「上天気だ」

「くだらない天気だ、昨日晴ればいい事を。——そうして顔は洗ったのかい」

「顔はとうに洗った。ともかくも起きないか」

「起きるつて、ただは起きられないよ。裸で寝ているんだから」

「僕は裸で起きた」

「乱暴だね。いかに豆腐屋育ちだつて、あんまりだ」

「裏へ出て、冷水浴をしていたら、かみさんが着物を持って来てくれた。乾かわいてるよ。ただ鼠色ねずみいろになつてるばかりだ」

「乾かわいてるなら、取り寄せてやろう」と碌いささんは、勢いきおいよく、手

をほんぽんたた敲く。台所の方で返事がある。男の声だ。

「ありや御者ぎよしやかね」

「亭主かも知れないさ」

「そうかな、寝ながら占うらなつてやろう」

「占つてどうするんだい」

「占つて君と賭かけをする」

「僕はそんな事はしないよ」

「まあ、御者か、亭主か」

「どつちかなあ」

「さあ、早くきめた。そら、来るからさ」

「じゃ、亭主にでもして置こう」

「じゃ君が亭主に、僕が御者だぜ。負けた方が今日一日いちんち命令に服するんだぜ」

「そんな事はきめやしない」

「御早う……御呼びになりましたか」

「うん呼んだ。ちよつと僕の着物を持って来てくれ。乾いてるだろうね」

「ねえ」

「それから腹がわるいんだから、粥かゆを焚たいて貰もらいたい」

「ねえ。御二人さんとも……」

「おれはただの飯めしで沢山だよ」

「では御一人さんだけ」

「そうだ。それから馬車は何時と何時に出るかね」

「熊本通いは八時と一時に出ますたい」

「それじゃ、その八時で立つ事にするからね」

「ねえ」



「君、いよいよ熊本へ帰るのかい。せつかくここまで来て阿蘇<sup>あそ</sup>へ上<sup>のぼ</sup>らないのはつまらないじゃないか」

「そりゃ、いけないよ」

「だってせつかく来たのに」

「せつかくは君の命令に因<sup>よ</sup>つて、せつかく来たに相違ないんだがね。この豆じゃ、どうにも、こうにも、——天祐<sup>てんゆう</sup>を空<sup>むな</sup>しくするよりほかに道はあるまいよ」

「足が痛めば仕方がないが、——惜しいなあ、せつかく思い立つて、——いい天気だぜ、見たまえ」

「だから、君もいつしよに帰りたまえな。せつかくいつしよに来たものだから、いつしよに帰らないのはおかしいよ」

「しかし阿蘇へ登りに来たんだから、登らないで帰っちゃあ済まない」

「誰に済まないんだ」

「僕の主義に済まない」

「また主義か。窮屈な主義だね。じゃ一度熊本へ帰ってまた出直してくるさ」

「出直して来ちや気が済まない」

「いろいろなものに済まないんだね。君は元来強情過ぎるよ」

「そうでもないさ」

「だって、今までのただの一遍でも僕の云う事を聞いた事がないぜ」

「幾度もあるよ」

「なに一度もない」

「昨日きのうも聞いてるじゃないか。谷から上がってから、僕が登ろうと主張したのを、君が何でも下りようと云うから、ここまで

引き返したじゃないか」

「昨日は格別さ。二百十日だもの。その代り僕は饅飩うどんを何遍も喰つてるじゃないか」

「ハハハハ、ともかくも……」

「まあいいよ。談判はあとにして、ここに宿の人が待つてるから……」

「そうか」

「おい、君」

「ええ」

「君じゃない。君さ、おい宿の先生」

「ねえ」

「君は御者ぎよしやかい」

「いいえ」

「じゃ御亭主かい」

「いいえ」

「じゃ何だい」

「やといにん雇人で……」

「おやおや。それじゃ何にもならない。君、この男は御者でも亭主でもないんだとき」

「うん、それがどうしたんだ」

「どうしたんだって——まあ好いや、それじゃ。いいよ、君、あっち彼方へ行つても好いよ」

「ねえ。では御二人さんとも馬車で御越しになりますか」

「もんちやくちゆうそこが今悶着中さ」

「へへへへ。八時の馬車はもう直ぐ、したく支度が出来ます」

「うん、だから、八時前に悶着をかたづけけて置こう。ひとまず

引き取つてくれ」

「へへへへ御緩ごゆつくり」

「おい、行つてしまつた」

「行くのは当り前さ。君が行け行けと催促さいそくするからさ」

「ハハハありや御者ごしやでも亭主ていしゅでもないんだとき。弱つたな」

「何が弱つたんだい」

「何がつて。僕はこう思つてたのさ。あの男が御者ですと云うだろう。すると僕が賭かけに勝つ訳わけになるから、君は何でも僕の命令に服さなければならなくなる」

「なるものか、そんな約束はしやしない」

「なに、したと見倣みなすんだね」

「勝手にかい」

「曖昧あいまいにさ。そこで君は僕といつしよに熊本へ帰らなくつちや

あ、ならないと云う訳さ」

「そんな訳になるかね」

「なると思つて喜こんでたが、雇人やといにんだつて云うからしようがない」

「そりや当人が雇人だと主張するんだから仕方がないだろう」

「もし御者ですと云つたら、僕は彼奴あいつに三十銭やるつもりだつたのに馬鹿な奴やつだ」

「何にも世話にならないのに、三十銭やる必要はない」

「だつて君は一昨夜いっさくや、あの束髪そくはつの下女に二十銭やったじゃないか」

「よく知つてるね。——あの下女は単純で気に入つたんだもの。華族や金持ちより尊敬すべき資格がある」

「そら出た。華族や金持ちの出ない日はないね」

「いや、日に何遍云つても云い足りないくらい、毒々しくつて  
ずうずうしい者だよ」

「君がかい」

「なあに、華族や金持ちがさ」

「そうかな」

「例<sup>たと</sup>えば今日わるい事をするぜ。それが成功しない」

「成功しないのは当り前だ」

「すると、同じよう<sup>あした</sup>なわるい事を明日やる。それでも成功しな

い。すると、明後日<sup>あさって</sup>になつて、また同じ事をやる。成功するま

では毎日毎日同じ事をやる。三百六十五日でも七百五十日でも、

わるい事を同じように重ねて行く。重ねてさえ行けば、わるい

事が、ひっくり返つて、いい事になると思つてる。言語道断<sup>げんごどうだん</sup>だ」

「言語道断だ」

「そんなものを成功させたら、社会はめちやくちやだ。おいそ  
うだろう」

「社会はめちやくちやだ」

「我々が世の中に生活している第一の目的は、こう云う文明の  
怪獣を打ち殺して、金も力もない、平民に幾分でも安慰を与え  
るのにあるだろう」

「ある。うん。あるよ」

「あると思うなら、僕といつしよにやれ」

「うん。やる」

「きつとやるだろうね。いいか」

「きつとやる」

「そこでともかくも阿蘇<sup>あそ</sup>へ登ろう」

「うん、ともかくも阿蘇へ登るがよかろう」



二人の頭の上では二百十一日の阿蘇が轟々と百年の不平を限りなき碧空へきくうに吐き出している。

二百十日

底本：「夏目漱石全集 3」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 12 月 1 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）年 1 月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999 年 2 月 19 日公開

2004 年 2 月 27 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。